

冬季展

「冬の行事と遊具」

展示案内

平成12年1月～3月

金沢市立玉川図書館 近世史料館

えどおもてならびにおくにもとおひろしきねんちゆうおいわいかた
1. 江戸表並御国許御廣式年中御祝方

(16.14-19)

これは、幕末に算用者坪内一致により手録されたもので、当時の加賀藩における年中恒例の祝儀について記述されている。

年頭の蓬菜から始まり年末の鏡餅の飾り付けにおわる行事についての解説で、特に食事の献立について詳しく記されている。

ここでは、正月2日の行事についてまとめられており、「御買初」などについての記述がある。

おすすはらい おきしき おぐそくもち おかざりす
2. 御煤払御規式および御具足餅御飾図

(16.14-27)

城中における煤払いと具足餅飾りについての解説、作法を絵図を使い記したもの。ここでは、具足餅の飾り方について詳細を記した部分を展示した。

具足餅は、正月に甲冑に供えた鏡餅のことで、戦国時代以来、武家に伝わっていた。供えた後、正月11日にこれを食べて祝賀する習わしで、材料などを細かく図示している。

煤払いは、その年の年男となる会所(藩の物品出納を取り扱う)奉行が装飾を施した竹を持って始める儀式のこと。終了後、参加した役人に煤粥と酒が振る舞われた。

この史料の旧蔵者である小島為善は文化14年(1817)生まれ。通称吉三郎、文左衛門、吉二。史料中では、御料理人と自書しているが、小島分器の名で俳人としても知られていた。明治26年没。

ねんちゆうぎようじひしよ
3. 年中行事秘抄(20.3-40)

江戸時代後期に編纂された叢書「群書類従」の中から、主として朝廷の年中行事にかかわる記述を抜粋したもの。12ヵ月それぞれの月におこなわれた行事や事項について書かれている。

よしわらねんちゆうぎようじ
4. 吉原年中行事(21.3-76)

これは、江戸時代後期の吉原(江戸)の様子を、年中行事を絡めて紹介した上下巻の冊子で明治40年に復刻したものである。

初版は享保4年(1719)に出版され滑稽本の大家、戯作者十返舎一九(じっぺんしゃいっく)が解説および編集、美人画で多大な人気を得た浮世絵師喜多川歌麿(きたがわうたまろ)が挿画をそれぞれ担当している。

これは、吉原の中央を貫いていた街路・仲の町における年礼(新年の挨拶)の様子

を描いたもので、中心となる華やかな花魁(おいらん)に群がる人々の様子や、松飾り、大黒舞い、羽子板など正月ならではの風物を見ることができる。

このように、正月や8月1日に遊女が正装して廊の中を練り歩くことも花魁道中(おいらんどうちゅう)と呼ばれた。

5. むかしのじゅうにかげつ 昔の十二月 (16.86-35)

加賀藩士からみた金沢の年中行事を記すと共に、付編として参勤交代時の諸行事も記す。

6. ねんちゅうぎょうじしやしん 年中行事写真 (21.3-89)

この写真は、旧藩時代江戸三度飛脚をつとめた村松家所蔵の様々な祝い事関連資料を、当時の年中行事として展覧会に出品した際の写真と推測される。それぞれの時期に分けた展示方法は現在とさほどかわることもない。近代を迎え西欧化を急いだ日本国内では、欧米の万国博覧会などに強い影響を受け、勸業博覧会などが全国で盛んに催された。当初は博物館的な展示方法が理解できず、日本に以前より伝わる見世物的な展示になることも多かったが、次第に洗練されていく。この写真からも、そういった試みが感じ取れる。

正月の写真では、具足餅飾り、天神堂、盤双六、旗源平、百人一首などが、2月、3月では凧(日の丸扇型)や雛飾りを見ることができる。

7. たからぶね 宝船 (980-13)

宝船は縁起物のひとつで、室町時代頃から行われていたとされている。

薄墨紙を使い、唐様船の上に七福神と米俵ほか様々な宝物が積まれた絵が描かれている。また、「ながきよのとをのねふりのみなめさめなみのりふねのおとのよきかな」という回文歌が添えられたものも多い。

正月早朝より街頭で売り歩く宝船を人々は買い求め、その夜枕の下に敷いて寝ると吉夢を見ることができるとされた。

江戸時代には大いに流行したが、金沢市史には、明治初年頃まではしばらく売りにきたが、大正の頃にはすっかり途絶えてしまったことが記されている。

8. たからぶねしゅう 宝船集 (721.08-21)

大正7年に発行された宝船の絵柄集である。様々な意匠の宝船が鮮やかな色彩で描かれている。この冊子は、金沢九谷工業共同組合旧蔵で、九谷焼製品の絵付けに際し、宝船図案の参考にしたと推察される。

おぐらひやくにんいっしゅ
9. 小倉百人一首 (K9-389)

近世以降庶民に普及し、正月などに盛んに遊ばれた百人一首は歌集として成立したもので、平安末期の歌人、歌学者・藤原定家が撰者とも伝えられるが、撰者、成立年などは未詳。

天智天皇から順徳天皇までの各時代の著名な歌人百人の歌を一首ずつ選び、京都・嵯峨の小倉山山荘の障子に貼ったとの説からこの名称がある。

カルタの形態を取るものが主流ではあったが、このように冊子として楽しんだものも数多い。明治27年に発行されたもの。

えいゆうひやくにんいっしゅ
10. 英雄百人一首 (21.9-18)

江戸時代には、小倉百人一首を、様々なテーマに置き換えて発行することも多かった。これは日本史上の英雄の中から百人を選んで、その武勇伝などを上段に記載している。天保9年(1838)の発行。

ばんすごろく
11. 盤双六 (参考品-15)

盤双六の歴史は古く、古代インドあるいは古代エジプトが発祥の地と言われている。その後、中国を経て日本に渡来したが、日本書紀には朱鳥3年(689)12月に双六を禁止するとの令が発せられた記録が残っており、当時すでに賭けの対象として広まっていたことがうかがえる。その後、江戸時代中期あたりまでは、賭博の材料としての用途が中心となって伝わってきたが、賭博道具の変化などで徐々に忘れ去られ、天保の頃には遊び方も忘れ去られるほどであった。しかし、一部の人達は変わらず遊び続け、その後も嫁入り道具として明治期まで残った。

遊び方はたいへん複雑だが、基本的には2個のサイコロを振り、出た目の数だけ進ませることにより持駒15個すべてを対座した相手の陣地に先に入れたものが勝ちとなる。

この盤双六は、黒柿材を使い、側面および筒に梨子地も見られる蒔絵を施したり、取手の金具にも丁寧な彫金が見られるなど凝った造りとなっている。

えすごろく
〇絵双六

盤双六が大人の賭博遊具としての性格を起源としているのに対し、絵双六は、子供の遊戯具として江戸時代に出現した。宗教的な「名目双六」がその始まりと考えられ、その後、娯楽性が加わり「道中双六」などが登場した後、錦絵の隆盛にともない美しい彩色のものや、様々なルールが加わり充実した双六に変化していく。

近代に入ってからでも人気は衰えず、雑誌の正月付録に多色刷りの双六が登場するなど現在まで途絶えることなく続いている。

しんぱんかなざわどうちゆうすごろく
12. 新板金澤道中双六 (K7-129)

江戸・日本橋をふりだしに中山道を使い信州、上越から北陸に入り上がりの金沢までの道中双六で、江戸後期の発行と思われる。

現在と隔世の感がある各駅、宿場での風景や、人々の生活ぶりなどがわかり興味深い。

かなざわめいしやうにざわいすごろく
13. 金沢勝地賑双六 (K7-137)

年号の記載はないが、明治中期頃には発行された金沢の名所双六。

上がりの博物館は明治7年に正式に勸業博物館として開館したもの。また、銅器会社は明治10年に長谷川準也が創設している。木造洋風建築が目立つところなどから、西欧文化の吸収に必死だった当時の世相もうかがえる。

かなざわめいしよすごろく
14. 金澤名所寿語録 (K087-349)

明治34年10月発行。当時は「すごろく」の音にいろいろな字を充てて、吉祥をあらわした。当時の歴史的な名所が多い。

かなざわはんじやうすごろく
15. 金沢繁昌寿娛六

明治35年1月発行の金沢新聞の正月付録。市内の要所、観光地、劇場、料亭、銀行、商店などが登場する。

てんじんどう
16. 天神堂 (参考品-11)

加賀藩において菅原道真は特別の存在であり、とくに三代藩主利常以降は、道真を積極的に遠祖と崇め奉っている。それを証明するように、加賀、能登には菅原神社、天満宮を称する神社が多数あり、その数は県下で134を数えている。天神堂という玩具の成立にこのような地域性が大いに影響したことはいうまでもない。

菅原天神が日本各地で「学問の神様」として奉られているのと同じく、この天神堂も子供(男子)の学問成就を願い飾られた縁起物の玩具といえる。

形態はまさに菅原神社の再現といえるもので、神門、鳥居、神殿、などを組んだ木製の社の中に土人形の神体、隨身、狛犬、太鼓、灯籠、手水鉢などが飾られる。

天神堂は他の地方でも見ることができるが、金沢のものは大振りで豪華なものが多い。通常、年末から正月にかけて飾られたが、12月20日頃から店頭に並べられていた。江戸時代に始まり昭和の30年代頃まではよく飾られたが、現在ではほとんど見ることはできない。